



エレキテ  
ル

川崎ゆきお

これはおかしい、これは妙だ。これは異常だ。これは危ない。などは刺激的で、全身全霊で受け止めたりするため、生きている心地がするのだろう。実際には危ないので、生きた心地はしないのだが、生きている実感とは危機を脱したときほど感じやすい。

というようなことを考えているとき、妖怪博士付きの編集者がやってきた。また下世話で稚拙な話をしないといけないだろう。

「今日は魂についてです」

「靈魂かね」

「はい」

「それはもう、色々なところで語り尽くされているので、私が付け足すことなどない。太古の民族から、ギリシャの哲学者まで語っておる。靈魂を語らない民族はない」

「魂とは何でしょう」

「感情だろう」

「え。あっさりとして済ませていいのですか」

「気持ちでもいい」

「どうしてですか」

「魂を震わす歌。魂を揺さぶられる出来事。いずれも魂を感情に置き換えれば、すんなりする」

「じゃ、魂は何処にあるのですか」

「臍の緒のように、魂の尾があって、肉体と繋がっておるとか言うがな」

「器官としては何処でしょうか。心臓とか、脳とか？」

「器官なき身体と言っていた哲学者もおる。最近の人だ。これが当たっているかもしれん。任意の器官ではなく、任意の肉体的箇所ではなく」

「はい」

「例えば人が死んだ瞬間、水が出る」

「そうなんですか」

「病院で亡くなったときは、シーツが濡れておる」

「やはり何か、入っていたのですね」

「だから、死にいく人には末期の水を与えないといけない」

「はい」

「それは冗談だ」

「またまた」

「魂を込めた作品。これも感情を込めた、気持ちを込めたで言い換えられる」

「そうですねえ。しかし、魂は感情だとしてもですよ先生、本体が消えても魂が残るとなると、

感情は何処で発生するのでしょうか」

「感情だけが浮いておるんだろ」

「じゃ、主体なき感情ですか」

「器官なき感情だ」

「それは、ただのエネルギー体のようなものですね」

「それを魂と呼んでおる」

「魂は魂で、別にあるんじゃないのですか」

「感情の強いのが魂だとすればいい」

「感情ですか」

「気持ちでもいい。だから魂を磨くとは、そういった感情面を磨くと言ってもいい」

「感情は瞬間的な出来物ですが、魂は本体が入っているはず。だから、感情と魂は違うのではありませんか」

「ありませんか、か」

「はい」

「感情がなければ自覚できん。生きているのか、死んでいるのかも分からん。だから、感情はメインだ」

「本当ですか」

「ただの想像だよ。だから、妖怪も人々の感情が作り上げたもの。そこで発生したもの。だから、その感情に何らかの有機体が絡んだとき、具体的な姿となって立ち現れる」

「でも、そんなことは有り得ませんねえ」

「ないのう。しかし、現実にはなかつても、感情的にはあるように見える。だから、幽霊も妖怪もいるのだ」

「感情は物質的には何でしょうか」

「ああ、それはエレキかもしれん」

「電気ですか」

「気だろう。電気が何故生じるのかを考えればいいが、私はそのあたりに詳しくない」

「静電気なら分かりやすいですよ」

「接触だな」

「では、感情が電気だとすれば、雷のようなものですか」

「わずかに電気を帯びているだけなので、大したことはない。ここにチリなどが絡むと、物質的な動きとなる」

「何か、物質や星の誕生のようですねえ。ガスの発生から始まるような」

「ガスは何処から発生するかだ」

「宇宙の謎に至りますねえ」

「しかし、それらを知るには感情がいる。感覚や、それを方向付ける感情がな。これはおそらく、脳の中で電気が走っておるのかもしれない」、

「しかし、先生、靈魂感情論、面白そうです」

「大昔からあるわい」

「そうでしたか」

「エレキテルの時代に戻ってしまうがな」

「はい」

「電気の話をしていると、家電店へ行きたくなくなった」

「あ、はい」

了